宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神興 26番
定価一年 送料共500円

沖津宮大祭

昭和四十年沖津宮現地大祭は天候の都合により渡海を中止し、小雨降る五月二十七日午前十時、中津宮に於て厳かに斎行された。以下は奉仕坧員の手記である。

四月二十八日、久保宮司外一名は本年度の沖津宮参拝団の巡視船便乗依頼のため、第七管区海上保安本部並に博多保安部に赴いた。現地大祭の諸準備はこの日から本格的に開始された。

五月一日、参拝案内状を前年度の参拝者と篤信者へ向けて発送した。人数に制限があるため受付期間を十五日までとした。本年は特に日本海々戦六十周年にあたるため祭典終了后、日本海々戦の民間唯一の実見者である佐藤市五郎老人（当社坧員）による記念講演会を催す事とした。

五月十五日、申込みは既に定員に達し係坧員は連日、又次の機会に参拝下さる様にとことわりの連絡に追われた。受付名簿を見れば遠く東京、京都より多数の申込みがあり御神徳のあまねく光被するところと感慨一入のものがある。この頃より各種報道関係の問い合せが頻繁となった。

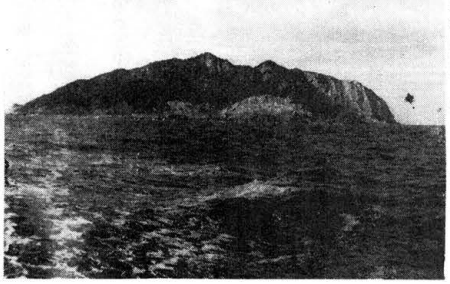
五月二十六日、前日より降り続いた雨は未だ止まない。祭典用具の点検をしながら天気予報に聞きいる「低気圧の九州南岸接近により二十五日深夜から雨が降り出したが、この雨は二十六日の午前中まで続き、二十七日の天気は快復する。なお台風六号はフィリッピンの東海上にあって北々東へ進行中。午前十一時祭員四名は天気予報に一縷の望を託して豪雨の中を大島中津宮へ赴き、社務所に於て参拝者の受付を開始した。

午后一時博多海上保安庁より「台風六号接近に伴い沖島周辺の海洋状況が非常に悪化しつつあるため、渡海は中止されては如何」と連絡があった。多数の参拝者の安全を気づかっての配慮である。

好意を感謝し、やむを得ず渡海中止の旨の返事をした。

天候を心配した参拝者よりの問い合せには、明日の中津宮に於ける祭典時間を通知し祭典準備にとりかかった。かくして本年の沖津宮現地大祭は終了した。神湊渡止場附近の人の話によれば、二十六日凡そ六〇名の参拝者が、大島行き最終連絡船に乗船するために集った。沖島渡海中止の報らせが伝わる中、この参拝者は各々通るか海彼の沖島を伏して拝んで帰途についたという、大社ではその志に報いる為に当日の撤下神饌を参拝者全員に送付した。

（写真は神島沖の島）



宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (371) 八八六九番
九三七二番
八五九一番
振替口座京都一五

論説　肩書の国の侍たち

敗戦後まことに無残な姿で朝鮮を引揚げる時、平素世話になった朝鮮人のお歴々に挨拶をしたことがある。中に知事の経歴を持つ人物が、帰国の餞別を差上げると前置きして、次のような話をしてくれた。

「日本人くらい肩書にこだわる国民はあるまい。美点と言える一面もあるか知れぬが、これが人を毒し多くの不幸を作っていることも見逃せない。朝鮮海峡を渡るとき、すっかり肩書を捨てて荒廃の祖国の土を踏みなさい。それが捨てられぬ限りは、個人も国家も真の復興は期せられない。肩書を捨てお帰りなさい」と。

大切に抱いて帰らねばならぬ肩書も持ち合さないが、痛い餞別をありがたく頂戴した。国土は占領されていた。元部隊長でさえ栄達がある。中に知事の経歴を持つ人失調で路傍に斃れた豆腐の街に、ボロ服を纏って荷車をひく身は文句なしに一切を捨てさせられていたのである。

この変った餞別をくれた朝鮮人は、朝鮮の官界財界に羽振りをきかした多くの日本人から、いやと言う程肩書を振り廻され優越感を誘う。

「このペルシャ猫は十万円で、この秋田犬の血統は」と犬猫病院で犬猫の書紹介。まさか藤原鎌足の後裔に当たる犬猫はおるまいに、医者は有閑マダム自慢の肩書を全部聞いてやらぬと商売にならぬそうである。

「あの奥さんの二主人は宅が課長の時、部下だったんです」と、容貌や年齢の若さで負けた買物夫人の不満は主人の肩書に飛び、魚屋の店頭で優劣勝ちの判定をもとめている。これに感心したようにうまく合槌を打たないと、高価な鯛は売れない。

文学士の肩書が欲しいばかりに助教授を辞めてその学校の学生になった話。医学博士の看板を出さぬと患者が来ない医院。刑務所の履歴を重ねない蝙蝠がきかないやくざ仲間。ショーペンハウエルが冷笑した虚栄心の誇示は、肩書の国の巷にあふれている。

どうやら肩書尊敬の国に生れた若い侍たちは、この一束の笑草を読んで、肩書に憧れを感じ肩書を恋するか。何を目的に学歴を履み、何を獲得せんと任事に励むか長のつく肩書は威服の道具か、女も如何に滑稽、横暴、陰謀、抗争などの文字がそのまゝ当てはまる肩書癌恐の歴史が織り込まれていることか。

「遠からん者は音にも聞け、我こそは何の後裔何の官位」と長々と名乗りを上げて身分を誇示した合戦物語。肩書の威圧である。

「新郎は何大学出身の秀才で、剣道何段、何が何段で合計何段」と結婚式の祝詞。肩書亡者のベタほめも滑稽で、肩書のデコレーションを神妙に聞いている連中は、ひやかされているかと思えて憐れみを誘う。

「あの奥さんの二主人は宅が課長の時、部下だったんです」と、容貌や年齢の若さで負けた買物夫人の不満は主人の肩書に飛び、魚屋の店頭で優劣勝ちの判定をもとめている。これに感心したようにうまく合槌を打たないと、高価な鯛は売れない。

文学士の肩書が欲しいばかりに助教授を辞めてその学校の学生になった話。医学博士の看板を出さぬと患者が来ない医院。刑務所の履歴を重ねない蝙蝠がきかないやくざ仲間。ショーペンハウエルが冷笑した虚栄心の誇示は、肩書の国の巷にあふれている。

どうやら肩書尊敬の国に生れた若い侍たちは、この一束の笑草を読んで、肩書に憧れを感じ肩書を恋するか。何を目的に学歴を履み、何を獲得せんと任事に励むか長のつく肩書は威服の道具か、女房を喜ばす無形の肩章か。卒業証書は飯の種か。肩書配当の投資を賭けた四苦八苦の点取り勉強、上司の二機嫌とりや抜擢を狙った奮励努力などは、滑稽であり悲哀である。その演出は場の興ぎに過きない。それだけで終ればまだよい方で、嫉妬、陰謀にまで及ぶと、名誉欲財産欲の虜となる悲劇も拍車がかけられるであろう。

近頃週刊誌やテレビは秀吉のブームを起している。このペルシャ猫ならぬ野良猫は、毛なみのよくない人生のスタートに立って、最初から太閤の肩書なぞ決して夢みたとは思われない。草履取り足軽から冷飯侍と堅実に歩んで、その任務に最善を尽し一歩づゝ大きな家臣としてさき主としての誠実の勝利をおさめて行ったのである。

何等の肩書も持たぬ裸の秀吉が、乱世の英雄たるには信を人の腹中におく誠実があったにちがいない。一挙に砂上に楼閣を築くなど、挫折凋落の悲劇を迎る悪夢でしかない。

学徒もその家庭も徒に秀才の誉を得んとあせり、若き社会人はよりよきポストに幸運があると無理なあがきを見せる。いづれも誠実と公平を愛する人にはなれない。悪平等と特権意識は平和の害虫である。一個の平凡な足軽でも、肩書を追わぬ気骨稜々清風颯々の無言の誇りを投ゞ好男子であって欲しいものである。

（白雲）

× × ×

中津宮勉強室　補習授業始まる！

既報の通り、中津宮社務所に於て進学生徒の補習の一環として勉強室を開設する事になっていたが、諸般の事情に依って漸くこの程補習学習が始まった。

補習対象は大島村の小中学生としているが、現在では希望者が多いので主として進学希望の中学生だけにしぼっている。

教鞭は当社中津宮奉仕の養父権祢宜が取って、毎週二回、夕刻より社務所に於て英語、数学を中心として行なっている。

夕刻になると良い子達が教科書や、ワークブックを持って社務所に集まる。

養父権祢宜が本日の学習の要点を説明、直ちに前回学習した個所をテストして、その結果をみて先に進むと云う方法で、理解出来ない生徒には個人的に指導して、その向上に努めている。

当社中津宮が鎮座する大島村は離島の為、進学生徒の為の塾等がなく、大島村父兄の強い要望もあって、大社では育英事業の一助として開設したものである。

将来は全科目の補習塾を整えたいと神社では考えている。

生徒らは此の梅雨に負けず、熱心に受講している。蚊が多いので、ピシャピシャ叩く音がする。

普段は静かな社務所の広間が少年少女らの熱気と講師の声で賑やかになる。

受験期が来れば、講義もますます拍車がかけられるであろう。

中津宮の神様もきっとお守り下さるに違いない。

阿蒙少官

東都は築地あたりの料亭街に人力車がふえてきた。今の青少年は明治大正文化華やかなりし頃、これが街の交通機関の主座を占め、かって大陸へ、日本創作の乗用車として売り出した逸品の復活とは知るまい。狭い通路も自由で、面倒な交通規制もなく、高島田の麗人が気楽に乗っている模様、震助の観覧屋まで復活すれば、東海道珍カンコンとなって天保は近くなりにけりと喜ぶ尚もあろう ○マンモス都市に泣く上ッ方東京、美醜の差を織りまぜて今も源平盛衰記は綴られてゆく。こんな所で暮さなくても、田舎人は気の毒がるが、寂しさの中に現代人の生甲斐があるとなれば、同情は無用。但し幼童だけは緑の山、青い海の懐に、のびのびと育てたいもの ○近代産業の発展は農地をつぶし、漁場を埋めて、山河の風姿まで変えてゆく。漁場の補償金で成金になった漁民、米より地代と、算盤をはじいた農家、果して皆よき結果を見せているだろうか。勤労意欲は極度に低下し、驚沢と遊興がどんな末路を歩ませるか。これも亦崩れゆく自然が遺す幻影、文明の車は悉くふい。

○時代の急テンポは、どの道にも短期間に多くの修練を要求する。女優として五十年、今や演劇界の最高峰に起つ水谷八重子女史は「これからの俳優は多種多様の芸道の修練を、急速度に身につけてゆかねばならない厳しさがある」と述べて、後進の甘さを戒めている。秀れた資質、不屈の鍛練がいつの世に何事をなるか栄決 ○日く「憲法改悪反対、戦争反対」日く「重役は外車でゴルフへ、社員は家族連れで貝拾いに」いづれも結構。結構でないのは十分働きもせずに、十二分の賃金を欲しがる悪平等悪権利の亡者たち。

（白雲）

第五回　宗像大社献詠歌会詠草

六月六日　於社務所詠草到着順

神湊　隣船　俊
漁師町松原行けば海の音石の祠や銘は古びて

陵厳寺　真鍋　万三
朝夕にをろがむ度にあり日のおやのおしへに涙ながるゝ

村山田　吉田佐市郎
長かりし夜寒やはらぎ久々にアンカ外して寝床につく

厚　狭　篠田　南洞
行けどゆけど杉の並木の続きて墓まで続く苔むす墓群

福　岡　高橋　昇
飲み足りし弟は先に逝きにしが吾は残りて淋しく飲む

小　倉　大和　虎雄
鵜籠屋まで復活すれば、東海道藤蔓の老木となりて軒しのぶ数多もつけつ今も花咲く（故郷の小学校）

和布刈　永島　まち
このあたりなれが眺めにうきぞとて亡夫株分けし鈴かけの花

コロラド　浦野　薫
日本語を使ふ折なく一世の集まればおのづ鰹吉となる

福　岡　吉田　信夫
薫風に空をば鯉の躍るなり五月は男の子の祭にあれば

盛永　邦夫
ひとときの療養終へて事務室に初仕事なるソロバン磨く

吉　留　松本はぎの
遠く来し友見送れば桜月夜花を見上げてひとり佇む

勝　浦　永島　計七
湯の宿の昼静かなり浴客の話国訛りに独り微笑む

岡　垣　長畑　房江
手鏡に草萌えの頃見たりしが遥かに伸びてゆれてゐる草

東　郷　小野角次郎
銀色の雲棚引かせ五月空汽車は行くく隧道ぬけて

小　野　花居
苑園はらから集ふこの庭に母上ことのいとゞ悲しき

朝　町　井上陽之助
ついばみつ飼ひつゝ飛びつしばらくは狂ふが如し軍鶏の戦ひ

東　郷　藤崎　辰子
収穫ををへし蜜柑葉いきいきと五月の風に揺ぎてをり

戸　畑　伊規須ゆき
憶良大人も眺めましけむ行き暮れて没り陽に映えし嘉摩の山脈を

大　井　安部　重郎
行く春や旅愁に似たる雨の宵古き書とも出してひもとく

〃　安部　静子
戸を繰れば鷹美人草は雨風にうたれ戦ける様のいたまし

〃　吉田　杏子
久方に駅に来たれば水蓮の花咲きゐたり白とくれない

戸　畑　田中ハツセ
大学の入試講座を夫と子は並びて聞き居り春の夜ふけを

江　口　辻野　開造
陽熱にゐるみ水を風呂に焚き時の流れをしみ〴〵思ふ

福　岡　林　まつえ
上ぎり行く五位鷺の声遠ざかりねむらえぬ夜も明に近きか

多　礼　藤崎保五郎
苗代を今し終へぬと筆とりし妻の手紙を病院に読む

吉　武　原田　松代
芍薬の蕾まろかに遠からず花開くを待ち朝夕に立つ

〃　原田　リノ
餌を持てる吾を離れぬ赤づらの猿はポスらしひとり食ひつゝ

筑　邦　津留崎初子
家業つぐことを運命と父と並び仏具を磨きし十代の若人よ

勝浦浜　永島　文子
読まず女と成りたる日頃の寂寞をテレビのせゐにしなすは悲かし

宮　田　片山　朔子
風舞へる音戸大橋渡り来てロビーに憩へば吹し白き灯

大　濠　江崎　琴子
憂きまでに精おり髪よ粧ひに好みし衣も心おかれて

吉　田　占部　由久
見舞ひ来し子を送りつゝ青葉の町共に歩けば風も薫りて

名　残　竹原　圓
婚礼の祝辞も終り出る宮の森の奥よりうぐひすの鳴く

吉　留　山下しづえ
バラの香のみちし花苑の落日に明日の倖せ心で祈る

〃　白木うめの
敏捷に測量機械かつぎ瀬をわたる国土調査の人等日にやけし

津屋崎　白石百合蔵
少年の衿足清くそられゐて月若葉の風匂ひくる

（四頁下段へつゞく）

暑中御見舞申し上げます
•海水浴と生魚料理•
——津屋崎旅館組合——

さぬき荘　電話 津屋崎 140番
正直亭　電話 津屋崎 45 232番
玉の井　電話 津屋崎 48番
津屋崎荘　電話 津屋崎 73番
筑水館　電話 津屋崎 28 265番
人気亭　電話 津屋崎 41 317番
守田館　電話 津屋崎 25番

宗像談話室　役人を走らせたごぜん様

「今夜は参籠潔斎して明日本殿の内陣を観たい」と高飛車のご託宣が下された。ご託宣の主は当時内務省神祇院の要職に在って、全国の神主達の意気地ないへつらいや、盲従により肩書の権威に益々磨きをかけた役人であった。聞いているのは天衣無縫のごぜん様。

「俺は監督下にある神主だから拒まないが、こゝでは内陣の扉を開くには少なくとも、七日間の参籠潔斎をする例がある。若し村の気の荒い漁師たちが、この厳しい慣例を破ったと知ったなら、俺達の大切な氏神さまを粗末にしたと怒り出し、無事に島から出られぬ始末になるだろう」と、威張ることを特権とし、その生命とする役人の高慢づらを、屁とも思わぬごぜん様の返事。

神主くらい他の肩書を恐れ、自らの肩書を誇る種族も少ない。まして戦前内務官僚の威風あたりを払った頃である。持前の反骨が頭をあげて、逆に威嚇した。まだ方々の神社を視察する日程があるからと、遂に拝観をあきらめた役人の退散となって、あとは爆笑。氏子総代を集めて盃を交わす得意のごぜん様に、手頃の酒の肴を残した次第である。

相手が悪かった。へつらい者の多い神主の中に、決して鼻息などうかゞわぬごぜん様に出会って驚いたことであろう。栄転左遷クビを極度に気にする神主を、あしらい慣れた役人の逃げ出す姿が、長く愉快な思い出となったことであろう。名利に無頓着なごぜん様の真骨頂が役人を走らせ、逆にごぜん様敬慕の度をたかめた。

ごぜん様はもとく官僚嫌いであり、肩書を自らも頂戴することを好まなかった。神主仲間の役職にも、一切就かなかった。強いてすゝめると大喝を喰って追い出される。明治の初め由緒ある家柄の神主家に、男爵が授けられた当時、ごぜん様の先々代が男爵よりコエビシャクの方がよいと辞退した話を、ごぜん様は我が意を得たりと喜んでいた。先祖の糟粕をなめて男爵様とたてまつられては、ごぜん様は我慢が出来なかったであろう。権威を恐れず、コエビシャクを振り廻した方が、似合っていたであろう。

「この書類は何度書き替えたらよいのか、どこが悪いのか」と内務省の小役人の前で、怒気心頭に発してどなりつけたごぜん様。胆を冷やしふるえあがった小役人「これで結構です」と忽ち難航の書類手続きは完了。官幣社昇格の頃の話である。

簡単なことを複雑に面倒にこねくるのは、いつの時代も官僚の通弊である。戦時中朝鮮で役所が疎開を奨めておきながら、いざ疎開をすることになると、ハンコを二十幾つか貰って歩かねば、手続きが終らないのには驚いた例がある。度々氏子代表が上京してもOKとならない。短刀を懐中にしてイエスかノーかと、睨みつけたら一ぺんに解決する役人根性を、後年ごぜん様は憐れむべき奴らだと語っていた。

「知事さんが参拝です」前触れもなく、突然の県知事来訪を、若い職員が慌てて取次いだ時、「服装は?」とごぜん様の質問。平服着流しで奥さん同伴、遊楽かたぐの参拝とわかった。ごぜん様が大急ぎで起ちあがると思いの外「遊びに来たのだろう、捨てゝおけ、俺は会わぬ」と突き放した。当時宮司は知事の監督下にある職掌である。急いで出迎え平身低頭するかと、知事は予想したかどうかは知れないが、みごとに玄関払いを食ったのである。誰であろうと遊びがてらの参拝など相手にする必要はない。これがごぜん様の意見である。内務省に悪く報告でもされると、左遷かクビかもと、神さまより役人や肩書に奉仕を怠らなかった官僚神主の中に、気骨稜々俺は神明奉仕者なりと白衣の権威を護持し、追従や、ごまかしを知らなかったごぜん様こそ、真の求道者に近い姿であっただろう。信仰の世界に生きる者、その風格が教える無水の水にみそぎしたいと内省する。

宗像大社中津宮七夕揮毫会
十周年記念大会準備進む

当宗像大社中津宮末社、牽牛宮、織女社の社伝に因み、昭和三十一年より始められた七夕揮毫会は、愈々十周年を迎えるに当り、記念行事として大会を如何にするかゞ六月八日午后一時より中津宮斎館に於て各代表の出席を得、打合会が行われた。

色々協議の結果左記のように、要項及び行事が決定した。

宗像大社中津宮
七夕揮毫会十周年記念大会

要　項

一、応募資格　小学校児童、中学校生徒

一、課題　小学校
- 一年　ほし
- 二年　あまの川
- 三年　七夕の竹
- 四年　五色の糸
- 五年　星光る空
- 六年　輝く星座

中学校
- 一年　宇宙旅行(楷書)
- 二年　空澄星輝(行書)
- 三年　金風玉露(随意)

一、規定
①字詰行数は随意
②和半紙(普通型)を縦に使用(規格半紙は不可)
③学年氏名を自書のこと
④校名は代筆又は校印にて可

一、予選締切　六月三十日(水曜日)

一、届先　宗像郡大島村　宗像大社中津宮揮毫会

一、予選審査　七月一日(木曜日)
小学校一、二、三各学年(八〇名)
小学校四、五、六各学年(一二〇名)
中学校一、二、三各学年(六〇名)
◉入選者は即日学校宛通知します。
◉入選者は整理の都合上、七月七日までに参加料一人七〇円宛前納して下さい。
但し揮毫会不参加の場合でも会費は学業振興会の祈願料として神納して戴きます

一、席上揮毫　七月二十三日(金曜日)
◉受付時刻、開始時刻、便船の発着時刻等は入選通知と同時に通知します。

一、審査　当日、中津宮において厳正審査の上発表します(公開)
◉賞規定
小学校一、二、三年
特選一名、金賞三名、銀賞五名、銅賞七名、秀逸二五名。
小学校四、五、六年
特選一名、金賞四名、銀賞七名、銅賞一〇名、秀逸三五名。
中学校一、二、三年
特選一名、金賞二名、銀賞三名、銅賞五名秀逸二〇名
○各学年を通じ最優秀者賞として小学生一名、中学生一名に宗像大社宮司賞を贈ります。
○各学年の特選者には夕刊フクニチ賞、尚文堂賞、福岡書道会賞が贈られます。
○金、銀、銅賞には中津宮賞、秀逸佳作には賞状を授与します。
※参加者全員に「十周年記念宗像大社文鎮」を贈呈します。

一、表彰式　当日、午後四時から中津宮社前にて行います。

一、学校賞　小学校一位　大優勝旗
中学校一位　優勝盃

一、審査員
古賀啓水先生(筑紫女子学園)
坂口雅風先生(福岡女子高校)
城戸筑山先生(筑紫ケ丘高校)

一、記念行事
サザエ取り、宝さがし
警察音楽隊の行進と演奏

宗像大社中津宮
夕刊フクニチ新聞社
大島村教育委員会

本揮毫会には他方面より種々の御協賛を戴いて居りますが、特に津屋崎中学校に転校された、大限校長先生を始め、大島小、中学校長全職員の方、大島村当局並教育委員会の絶大なる御支援を戴いて居ります事を厚く御礼申上げますと共に、十周年記念に当り、多数御参加下さる事を、紙上よりお願い致します。

文月の祭

一日　月次祭　午前十時

一五日　末社祇園祭　午前十一時

夏のさかりの農耕作業のまつり風雨鳥虫害のない様に末社須賀神社ー祇園の神ーに祈る。

三一日　夏越祭　午後五時

一年の前半期のうちにしらずしらずに犯した罪けがれをお祓いする行事で当大社の大抜式である。郡内全国から集めた人形(ひとがた)を抜って祈願者の幸福を祈る。

今月の交通訓
○明るく正しい安全運転

いよいよ充実!
宝物館模様がえ

当社宝物館は今年正月開館して以来拝観者の好評を得ている。特に西暦四、五世紀のものと推定される神宝類の精巧絢爛さは、同質のものが他に少いので驚異の的となっており、さらに此れらのものは上代の文化水準の最高を示していると云え、当社のみに多量に(二万一千余点)伝承されている点に対しては云う言葉もないとさえ漏らされる向が多い。

開館の時は諸般の準備を急いだので何かと充分でなかったが、かねて文化財保護委員会に寄託してあった残りの宝物類を此の度引取り、新たにケース等を作って陳列した。

先ず、「金銅雛形織機」。これは第一展観室の鐃類と共に陳列された。これは俗に地機(じばた)と称する類で、型としては最も素朴なもの。長さは48cm、前脚の高さは12.8cm、台の外巾は10.7cmある。

これには部品が全部揃っているので、今度初めて本格的に糸が掛けられ、五ー六糎布が織られた。神韻縹渺と漂う姿をしている。無論我が国唯一のものである。

次に鎧兜。これは足利尊氏佩用のものと伝えられる。相当に損傷していたものを完全に修理してある。九州に於ては最古のものと云われる。正式には「藍韋威肩白胴丸」と云う。重要文化財。

次に古文書類。これは八巻ある。平安鎌倉時代から近世までのもので、今度、横長の覗きケースが二ケ出来たので一部を展観した。

綸旨、教書、祈願文、書簡などが多い。当宮造立に関する院宣、頼朝、尊氏や足利将軍の文書などが見られる。重要文化財。

社務日誌抄

五日　神湊頓宮杭打ち、職員多数奉仕。宮崎県教育委員会主事来社。

六日　赤間駅長宅地鎮祭、職員一名出向奉仕。

八日　出光興産門司支店社員二名来社。

九日　会計監査会於社務所。

一〇日　柳田桃太郎氏参拝。神湊頓宮予定地測量、職員多数参加

一一日　神道青年会高千穂会長他五名来社。

一二日　門司出光興産上棟式、久保宮司他職員二名奉仕。

一五日　月次祭斎行午前十時。

一六日　出光興産石田専務他数名来社。

一八日　結婚式二組、前半期の挙式はこれを以って終了。

一九日　責任役員会開催於社務所。

責任役員会
昭和三十九年度決算

去る六月九日に吉武、立石両監査委員出席のもとに経理の監査会が行なわれ、同月十九日に昭和三十九年度宗像大社社務本局(辺津宮)並に海洋分局(中津宮)並に海洋分局(中津宮、沖津宮)の歳入歳出決算報告が行なわれた。

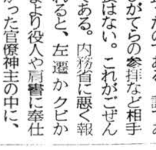
代表役員久保宮司の挨拶に続き決算の大綱説明の後、宇都宮経理課長が決算書の読み上げを行なった。続いて立石役員から監査報告があり、詳細正確に出納されている旨発表が行なわれ、役員全員異議なく承認された。

其後報告事項として、神門前の神池埋立の工事進捗状況並に宝物館運営の現況について報告が行なわれ、正午閉会した。

お化粧品とアクセサリー
可愛いマスコットが一杯!
よしむら
東郷　福岡銀行前

宗像四郎氏貞(三十七)

山下半可　作
福田長庵　画



宗像十四城　(二)

縁ノ城。名残城ともいう。許斐城からはほぼ東方にあたる郡境の徳重村にある。第七十六代宗像大宮司正氏は最初ここを居城とし、後に白山城に移ったという。通称茶臼山。

手光城。許斐城の西方にある。粕屋の立花勢に対する押えとして重要な位置にある。但しここは出城であって決戦をする為の城ではなかったので、氏貞は必要な時だけ番人の武士を配した。一名を冠山城という。

宮地岳城。勝浦岳城の西方一里余りの処にある。ここは宗像山系の海岸線に伸びている突端にあたっており、山中には宗像宮の末社の一つである宮地岳神社を祀る。手光城と共に西方の抑えであるが、此所には小樋蔵人が手勢を引き連れて定番した。

ケラ羽子城。郡の西方、本木村のうちにある。許斐兵部少輔氏則の居城。ここは粕屋郡と隣接しており、立花の家人大鶴宗松の守備している舎利倉の鵜ケ岳城(つぐみがだけ)に対抗して名付けられた城の名といわれる。

高宮山城。許斐城の南方出城。上西郷畦町にある。ここには吉原源内左衛門を定番せしめた。

飯盛山城。郡の西方、上西郷内殿村地内にある。許斐城の出城となっており、立花勢が宗像に侵攻するためには是非ともこの城を抜かなければならない重要拠点でもあった。

宮永城。鞍手郡にある出城。この方面を押える定番として吉田杢之助が配置された。

三吉城。ここは古城ではあるが創始は不明。三牧郡(現在遠賀郡のうち)にあって、ここは他国からの水軍に対する備えのため重要な所であった。若年の氏貞がこの城の構築を主張したが、奉行の老中(おとな)たちが神領民の戦時の困窮を申し立てて実現しなかった。浜表の押えとして堅固な一城を構築することは、爾来氏貞の念願となった。寺内豊前守に宛てた氏貞の書状が右の事情をよく尽している。

一、世間平均の砌、堅固の覚悟を遂げ、自然の時驚愕無き事都鄙珍らしからず候か　後略

一、重言乍ら申し候、安全の刻緩を以て押し移らば、時にのぞんで、つらつら油断の通り批判も之れ有り、悪口毎度に候、更に後悔せざるも、先ず家中のかたがたも亦其の諌めすくなく候条、是非兼案有るべきの儀、専一の事

一、前略　今にをては再興の外之れ無く候間　立てたく存じ候然りと雖も錯乱のとき、一力の建立難事に成るの条、助言に預るべき事。

右三ケ条の趣、足慮を残されず申し知らさるべき事ならば、よろこびと為すべく候、年寄中に対し、同前に申し候、恐々謹言

八月十一日　氏　貞

寺内豊前守殿

氏貞はこの城を半築造して、使用にだけは堪えるようにした。城代は置かなかったが、番人を少々置いた。

右のほか番所が二、三カ所あった。

一、赤城。蔦岳城(後に築造)の麓にある。番所となっている。

一、城ノ腰
一、草場城
} 何れも蔦岳城の番所。

氏貞が領内を手配したことによって事が一段落したのではなかった。彼は自分の本領に乗り込んで来たばかりであった。若年とはいえ、聡明英邁な氏貞は積極的に活動を始めた。

当時、隣国豊前に至る道筋の状勢は次の通りであった。

○三牧郡黒崎村にある花尾城ー城主麻生鎮実。
○上津役城ー城主高橋民部少輔。
○山鹿城ー城主麻生上総介元重
○竜岳城。鞍手郡竜徳村の竜ケ岳にある。ー城主杉権守連漣。
○古処岳城。嘉摩郡秋月村にありー城主秋月山門守文種。抱え城十二カ所あり。

また反対の筑後路の状勢は左の通りであった。

○柴田城。三笠郡天山村。ー城主筑紫上野介惟門。抱え城十三ケ所あり。
○宝満城ー城主高橋三河守鑑種。抱え城三ケ所あり。
○和久当城。三笠郡杉塚村。ー城主上野伊賀守。
○不動城。三笠郡牛頸村。筑紫氏の出城。ー城主奈良原兵庫介。
○立花城。粕屋郡立花山。ー城主立花但馬守鑑載。
○鷲岳城。那珂郡南面里村。ー城主大鶴弾正。
○荒平城。早良郡入部村。ー城主小田部民部少輔。
○淵曲城。早良郡曲淵村。ー城主曲淵河内守信助。
○高祖城。怡土郡にあり。ー城主原田弾正種門。
○柑子岳城。志摩郡草場村。ー城主臼杵紹察。
○尾山城。志摩郡小金丸村。ー城主小金丸民部少輔良種。

この外に小城が十四、五ケ所あったといわれている。

(つづく)

出光興産門司支店上棟式

去る六月十二日午前十一時、当社の司祭によって執り行なわれた。昨年八月二十九日に起工式が行なわれ、清水建設株式会社の施工により、屋夜兼行の突貫工事が進められていたが、十ケ月経った今日、早くも上棟式を迎えた訳である。

この出光興産門司支店は出光興産が事業を起した発祥地であるので、今回の支店建設にも並々ならぬ関心の程が窺われた。

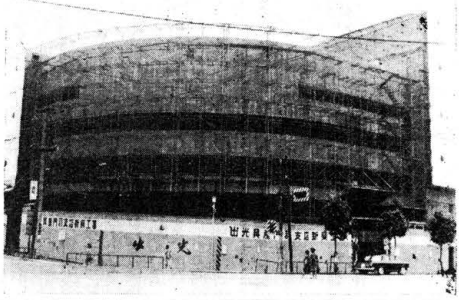
前日は雨天で、当日の天候が気づかわれていたが、朝来の晴天に恵まれて絶好の祭典日和となった。祭典は新しいビルの屋上で、行なわれた。青竹が立てられ、注連縄の張り廻らされた斎場に神饌（いもろぎ）がしつらえられた。

時刻、関係者一同参列。久保宮司の祝詞が厳かに奏上され、この後二名の神職によって「清め祓い」が行なわれた。

次いで出光興産の山又支店長、清水建設の支店長をはじめ、関係者の玉串拝礼が行なわれて、祭典は無事に終了した。

終って直会に移り、一同晴れ晴れと祝盃を挙げたのであった。

当日神饌の前に据えられた棟札には久保宮司の筆によって「奉鎮宗像大神」と墨痕も鮮やかに大書されてあり、これは祭典終了後に然るべき処に奉斎された。出光興産に於てこの様な棟札の例は珍らしい。並々ならぬ熱意と関心が払われていると前述したのはこの点である。



間もなく支店の新社屋が完成するであろう。何事も精神的ものが先行する同社のこと故、完成と同時に先ず神饌が奉斎されることであろう。神意を畏んで人事をつくす在り方が期待される次第である。

× × × ×

便り

前略　此度び御願い致しました御社田緒記本日到着有難う御座いました。御多忙中御手数を御掛け申した段何とも申訳けなく深く感謝申上げます。今後とも何分宜しく御厚情の程御願い申上げます。

新潟　宗像宗治　不一

御誌毎号ご恵送いただき御芳志深謝ながら拝見いたして居ります。敬神家の父則吉の宗像大社への遥拝の姿を私は物心ついて以来心にとどめて居り乍ら、遠く本籍地を離れ（高知に三千年近く在住、旧制高知高校以来、今日は高知大学で英語英文学を講して居ります）大社にも長い間参詣する機もありませんが御誌のおかげで「氏子意識」を辛うじて維持させていただいています。私は実は日本の「宗教」の今の在り方に傾倒する気持がもてないでいます。阿蒙少言は毎号必ず拝読、同感の点多う御座います。門司のメカノ神社でなく、貴大社でなつかしいワカメ刈りの神事が行われて軍と小鳥の営巣の記事に心ときめました。

高知　八波直則

× ×

宗像大社宝物館

宝物を訪ねて

帯金具

帯金具とは、馬具に使用されたバンドの金具であり、帯先金具三個と鉸具五個とがある。

金銅帯先金具（写真左）

金銅とは、銅に鍍金して仕上げたもので、構造は帯先を挟む基部飾板と長方形の飾板とを蝶番（ちようつがい）で連結し、表裏二枚を鋲止めしてある。

表板には、心葉形（ハート形）と霊形（ハート形外の形）の透彫があり、表裏の間には白雲母、更に心葉形の部分にのみ玉虫の翅を二枚背中合せに並べ、雲母板を挟んでいる。

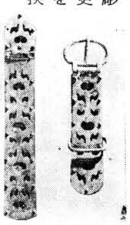
金銅鉸具（写真右）

鉸具（びじょうかなぐ）には、いずれも雲母の使用はなく、五個の中一個のみ玉虫の翅が残っている。これは着帯に際して帯先が表に出、鉸具は下にかくれるので仕上げの荒さが見られる。

帯先金具と鉸具は、組をなす帯金具であるので、元来帯先金具も五個あったものと思われる。

これ等の金具に使われている雲母板は、日本に産せず、朝鮮に多産することから、輸入し使用されたものと思われる。

このように古代陸上に於ける交通の主たる馬の用具に、最高の装飾をなし、神に供え交通の安全を祈念したものである。



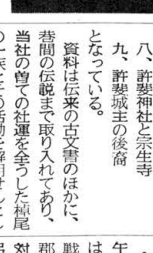
新刊紹介

宗像大社許斐城物語

史実の上で明らかなところだけでも、宗像郡は大化改新以来当社の神領となっていた。この神領を防衛し宗像大社の祭祀の伝統を伝承せんがために、そのかみの大宮司家を中心とする宗像党の結束と活動は目ざましいものがあった。時は正に天下騒乱の戦国時代であった。

宗像家中の藩屏として神領内に重きをなした家柄の中に許斐家があった。許斐家は代々郡内の要地である許斐城の城主をしていた。この城主が三代に亘って戦死をしている。これは如何に治乱興亡の世とはいえ、容易ならぬ事態と云わねばならない。

本書は、さきに昭和三十六年十二月十日、東都在住の許斐氏刹氏が、その先祖たる許斐三河守氏任公の四百年遠忌法要を営まれたのを機として、許斐一族の活動の概要を綱めたものである。



内容目次は

一、宗像大社の由緒

二、宗像大宮司家とその眷族

三、大宮司家の内紛

四、許斐家の創立

五、許斐城

六、戦国時代の許斐一族

七、許斐三代（氏能　氏任、氏賢）

八、許斐神社と宗生寺

九、許斐城主の後裔

となっている。

資料は伝来の古文書のほかに、書間の伝説まで取り入れてあり、当社の誇りである社運を全うした椋尾の一族とその活動を解明せんとした。近世衰微した大社が現在着々と社運を挽回して「現代の大復興」の緒につかんとしている折柄、本書により大社経営に関する現代的意義が再認識され、内外の奉賛が寄せられるなら幸いである。

B5変形版九十四頁クロス張。

希望者は宗像大社社務本局宛申込まれたい。

随想

宗教に期待されるもの

現代の青少年に「宗教」と云う言葉を発すると怪訝な顔付をする。「神社」と云うと、更に御幣を振り廻す古風ないでたちの異風な姿を思い浮かべる向きが多い。

青少年で無くとも、宗教に無関心な人々が多い。無関心と云うよりも、宗教を小馬鹿にして、そんなものは人生の阿片に過ぎないのだと云う嘲笑の声すら耳にする。

確かに「宗教」が全ての分野に威力を発揮した大昔とりも、現代は科学の発達によって、宗教の受け持つ分野は縮少した。医学、薬学の発達によって疫病から解放され、其の欲望は不老長寿に向かっている。

農業の発達と品種改良に依って農業が進歩し、気象観測に依って風水害が予知され、マスコミと交通機関の発達、工業のオートメ化は近代社会構造に一大変革をもたらした。

宗教がなくとも全て可能である。祈祷によって稲作を案ずるよりもヘリコプターで農薬散布をした方が早いし、大漁満足のお札を張り付けるよりも、電波探知機で魚群を追った方が気が利いていると考える人々が多い。事実、これらの事は御祈祷によって絶対に可能だとは考えられない。

かかる時点からは、宗教は誕生しない。否、宗教は必要ないとも言い得る。科学の発達は、宗教の受け継いで来た分野を、時代を追って剥奪した。然し、これは未文化時代の産物であって、太来的なものではない。むしろ科学の発達は宗教の領域を明確にしたとも言い得る。

宗教の受け持つ領域は、人間それ自身である。人間が社会生活を営む態度を決定付けるのが宗教であると考えられよう。端的に言えば人間の心の問題である。心と云う様なものは存在しないと云うならば精神構造と云うか、或は自我概念と云うか、いずれにしても自己の中心となるものを我々は心と呼んで来ている。

人間の心理不可思議なものはない。複雑多岐で、二様性を持ち、相反する性格を同時に持つ事が出来ると云うやっかいな代物である。

或る事柄について、こう処理すれば一番適切であると思いながらも、一方ではそうすれば、自分にとって損だからやめた方が良いと命ずる。このようなジキルとハイド的な事は、日常茶飯事誰もが経験する事であろう。

この複雑な心の問題は、宗教に依る他、絶対統御の道はない。自己自身の欲望との戦いは、他人が介在する余地はないのである。

人格完成への道程は、自己との戦いの歴史である。

欲望が無限に叶えられる場合はその後、人生の価値を見失うとしても一応の問題解決となり得る。だが現実は厳しく計画通り行かぬのが普通で、ここに欲求不満との対決が迫られる。

かかる問題が提起された時に、宗教は問題解決の態度をその宗教観から示唆するのである。どんなにあがいても一世紀内しか生存出来ぬ人間、必ず死滅する運命、大いなるもの、聖なるもの、大自然から生かされている人間、この「何々させている」と云う受動的態度から始めて自我を滅却した自己が誕生する。しかし、このような境地に到達しても、瞬時にして、又凡愚人足の身に帰すのが凡夫の常でもある。

心の安定をいかにして保つか、其の安定のアプローチと其の与え方とに各宗教の特異性がある。

概して、宗教を心の問題としてではなく、現世利益に関わるものとして、失なわれた自己を見出そうとするのではなく、神の御光だけを求めるものとしてこれに接する態度に多くの人々は反省すべき数々の問題を発見する事が出来る。

宗教の生命は、お守りや、おみくじにあるのではなく、又讃美歌や、読経や護摩にあるのでもない。それは手段であって目的でない。主体は人々の心にあるのだ。

古人が「神は信ずるべきものではない」と言う諺を残しているが、この言葉を今一度含味すべきであろう。

宗像伝説　其の五十一

郷党育英の先駆者　中村杏仙

宗像の地は昔から多士済々、郷党の誇りとする人物が少くない。現宗像町南郷野坂に中村杏仙という人がいた。彼は天保九年（一八三九年）八月に生まれた。時に家庭の事情により、幼時から福間町大善寺の憧音上人に預けられ、そこで育った。法号を眺雲と称した。眺雲は天性が利発であったので、十三才にして浄土宗の仏経を修得してしまった。上人は彼にその上の学識を得させるために、わざわざ漢学者を招いて勉強させるという力の入れようであった。

それほど、上人の期待も大きかったのであろう。眺雲少年の仏性も此の間に培われたといえよう。又後に彼が郷土の諸事業に私心なくつとめたのも、彼の天性を誘掖した憧音上人の力に負うところが大であったといえる。

ところで、眺雲少年の実家では、其の頃家を嗣いでいた兄が亡くなり、後嗣ぎが無くて困っていた。そこで親族らが相談して眺雲に家に帰って貰うことに決めた。

さあ、上人がおさまらない。仲タうんとは云わない。親族に困ってしまって郷党行に仲介を頼む仕末。漸く上人の許可を得ることが出来た。彼は還俗して家に帰った。時に十六才。名を杏仙と改めた。

家業は代々眼科医であった。これを継がなくてはならないが、修業のための学資が無い。天性の利発も、ここで行詰まった。これを聞いた郷の東部大庄屋石松林平の二人が援助を申し出た。曳く条件の条件が揃った。感激した杏仙は京都に飛んだ。学問を広瀬旭窓、篠崎小竹等に学び、医術を尾崎某に学んだ。次いで北愚溝田に趨き、溝医宮崎大春のもとで、研鑽数年、さらに尾張国愛知郡馬島村の眼科医妙眼院について秘伝を受けた。万延元年帰郷した。時に二十一才。性来の向学心はここに大成したのであった。帰郷後直ちに開業、手腕大いに顕われ、名声噴々たるものがあった。この間に、郷党子弟の育成に力をそそぎ、彼の学識を傾けて徳育を施した。中村竹太郎（後の野坂村長、県議、郡政功労者）ら幾多の人材が輩出した。

彼の情熱はとどまるところを知らなかった。また周囲が彼に期待した。村政の改善、人心の啓発、植林事業の奨励等、地方開発のために残した業績は大きい。

晩年、家業を鹿一てからは、陽邨と号して悠々自適、詩賦詩歌を楽しみとして過した。明治四十四年五月、七十四才を以て永眠した。

彼の遺言が伝わっている。

「鳥の死なんとする其の鳴や哀し、人の死なんとする。其の言や善し。我れ死に望んで善言なきも、人は其の子孫に幾多の金銭をのこし身えんとりは、愛の教育に力をつくすべきを可とす。金の為に子孫を愚にし、金の為に人望を失い、金の為に災害を醸し、遂に其の家を亡ぼす。古今史上に明瞭なり」

右の一部を見ても彼の人生観を知ることができる。

四男中、三人は医師となり、一人は教育家となった。

杏仙翁の歿後、郷党はその人徳を敬慕して彰徳碑を建てた。

彼の事蹟の概略は「宗像遺徳集」に収録されている。けだし、「人の為世の為につくす」という宗像人の典型ともいうべきか。

（H）

（写真は杏仙翁の墓。野坂の中村医院提供）

町村往来

◇農業危害防止月間……15日―7月14日。昨年は農薬による被害が自殺者だけで6人もあった。農薬散布に当たって注意するだけでなく、保管にも注意する必要がある。

◇イチゴ育苗研究会……11日午後1時、玄海町上田野のイチゴ畑で。東部農改母畜所吉田技師が指導。

◇玄海町水防協議会……18日午前10時、役場分館。消防、水難救済組合、部落長らが出席。

◇宗像町畝敵寺に交通安全の水銀灯…17日取りつけた。寄贈者の九電、郡交通安全協会、宗像署の各関係者が出席。同現場は赤間吉武方面へ通ずる県道と国道三号線の交差点でもあり、国鉄踏み切りに近接した交通事故の多いところ。こんどの水銀灯設置には地元民も大喜びしている。

（西日本新聞より）

◇古賀、津屋崎、福間町町政懇談会…7日午後1時、津屋崎町役場。各町の総務、企画担当課長が出席、合併問題など検討。

◇町村教育長と社教・公民館主事との懇談会…9日午前10時、東郷小講堂。講師は九大田中教授

◇郡保護司特別研修会…9日午後4時、郡防犯協会。後援西日本新聞社。

◇津屋崎町青少年団登山会…6日胃振山へ。

◇郡青少年柔剣弓道大会…6日午前9時半、宗高体育館。柔道は宗像、古賀、水産三高校の対抗戦。

郡内中学生の個人試合剣道は町村対抗試合のほか少年剣士も出場。弓道は二十歳までの青少年。主催郡防犯協会。後援西日本新聞社。

◇郡保護司特別研修会…9日午前10時、町村長会2階。福岡保護観察所佐藤観察官を迎えケース研究。

新築落成

倍旧のお引立てをお願い致します

生魚料理　大島屋旅館

宗像郡玄海町神湊

電話神湊三十一番

日立と共に五十年 (四)

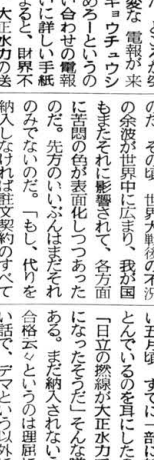
倉田主税会長の半生記

ついては復興を急ぐとともに、第一番に契約中の製品を、一日一刻も早く作って、お客さんに迷惑をかけないこと、その間いろいろの不便があると思うが、忍んで貰いたい」小平の訓話で一同ぞろ着きを取り戻し、再び活動する元気が萌いたのである。日立製作所の士気は上った。火事を契機として、精神的には前よりもガッチリと固まり、生産意欲もさかんになったのである。

主税は、幸いにして、自分の責任下にある電線工場が致命的な損害を受けなかったことを喜んだが、この大災厄に遭いながら、聊さかも閉口垂れることなく、益々勇気をふるって邁進する小平の決意に驚きと尊敬の念を新たにしたのである。火事場のあと片づけと、再興に取りかかるのと同時にスタートである。気を強くして工場再建の拡張を開いている主税のところに、すばらしい吉報がもたらされた。開業以来はじめての大口註文が舞いこんで来たのである。大正水力電気会社から塗方もなく大口の註文が来たのだ。

一番嬉しかったのは主税だった。「日立は、いま満身の力をこめて立ち上がろうとしているときだ。この註文をきっかけとして、ぞくぞく新しい註文が来れば、工場の復興に大きなプラスをすることが出来る。」そう考えたのである。註文の内容は、撚線三〇〇万フィートで、見方にすると一、〇〇〇トンである。勿論、いっぺんにこれだけの電線を作れるものではない。納入は何回かにわけて分納するということになっていたのである。「日立ではものすごい註文を受けたものだ」

「火事で参るかと思っていたが、あれだけの大註文があれば大丈夫だろう」業界でも、びっくりしたり驚んだりするほどこの仕事は大きかったのだ。正月早々から電線工場の一同は張り切って仕事に取り組んだ。製作の係も撚線の係も、日夜兼行で奮斗を続けた。第一回の納入が済んだ。続いて第二回の納品も発送を終った。続いて第三回、第四回と続々納入する段取りがついていた。ところが突然大正水力から大変な電報が来た。「セイサンサキョウチュウシセヨ」作るのを止めろ」というのである。慌てて問い合わせの電報を打つのと行き違いに詳しい手紙が着いた。それによると、財界不況の影響をうけて、大正水力の送電工事が中止のやむなきに至ったので、一応註文品の製造をとめて欲しいというのである。それだけでも青天の霹靂であるのにもっとひどいことをいって来たのだ。「既に納入せられたる製品は不良品であるから全部不合格である。よって早速別の品物を納入されたい。」これには驚くと同時に、主税の胸中には激しい怒りがこみあげるのであった。「不良だの不合格だのと、よくもそんなことが言える。まるでいいがかりではないか」主税は、製品にケチをつけられたことよりも、そんな卑劣な目実を設ける相手方の心情が憎くてたまらなった。納入品はすべて厳重な試験をしたので、不良品であるわけがなかったのだ。その頃、世界大戦後の不況の余波が世界中に広まり、我が国もまたそれに影響され、各方面に苦悶の色が表面化しつつあったのだ。先方のいいぶんはまだそれのみでないのだ。「もし、代りを納入しなければ註文約のすべてを破棄するであろう。」ほとんど脅迫と言ってよい。小平も怒った。「こうなったら正々堂々と法律にかけて争うほかはない」相手がゴロツキのようなことをする以上、紳士的な話し合いは望み得ない。然し日立製作所はメーカーであり、先方は仮にもお客さまである。あくまで静かに話し合い、おだやかに解決するのが会社としてとるべき道である。改めて納入品を調べたが、先方の言うような不良品ではない。主税は首脳部に具申して先方との立会検査を要求した。すると大正水力側では"技術上の問題ではない"との理由で、それを断って来たのである。

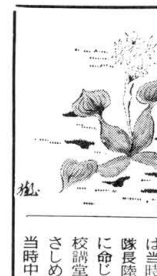


「おかしな話ではないか」日立ではそう言って相手の態度を怒った。"おかしな話"はそれだけではなかった。まだ納入をはじめない五月頃、すでに一部に妙な噂がとんでいるのを耳にしたのだ。「日立の撚線が大正水力で不合格になったそうだ」そんな噂なのである。まだ納入されないうちに不合格云々というのは理屈に合わない話で、デマという以外に考えようはない。誰が、なんの為にそのようなデマをとばしたのであろうか。考えてみると大正水力の態度は不可解千万と言わざるを得ない。「日立製作所の名誉にかかわるから、なんとしてでも黒白を明らかにしなければならぬ」小平の命令で大阪商業会議所の立会による通信省の試験を受けた。その結果、納入品はすべて合格品であることが証明されたのである。ここにおいて大正水力を相手どって契約不履行の訴訟を提起した。この争いはかなり長い間続けられ、主税は水戸及び神戸の両地方裁判所に三回にわたって証人として出廷した結局この問題は"製品が悪いのではなくて、全く経済上の問題である"ということになり示談となったのであるが、この事件によって主税は、他社の製品に対して無質任な批判などするものでないことを、身にしみて悟ったのである。

大口註文に欣喜雀躍したあと、こんどは相手の不信行為により、にがい経験をしたので、大正九年という年は主税にとって忘れることの出来ないものとなった。家庭的には、その年の七月に二男の博光が生まれ、倉田家は一層にぎやかになった。男子二人の子供を持った夫妻のよろこびは大きかった。然し、家庭のことを別にして、この年は日立製作所としては歴史的な年でもあった。二月一日日立製作所は名実ともに久原鉱業株式会社から分離し、株式会社日立製作所として独立することになったのである。資本金は二千万円である。いままでにも、実質的にはほとんど独立と同様であったが、法律的には久原鉱業の一事業部門であったのだ。三日の創立総会において、五人の取締役が選出され、続いて専務取締役の選挙を行なった結果、小平が当選した。社長は空席である。これによって明治四十一年にうっぽけな掘立小屋でスタートした小平の製作事業は、十二年を経て、ようやく久原の手を離れ、彼自身のものとなったのだ。勿論、株式会社組織であるから、個人事業ではない。然し誰が見ても製作所は小平の事業と言ってよかった。彼自身は自分個人の仕事だとは決して考えなかったが、みずから創業し、みずから人材を養い、みずから製作、販売の責任者となって育てて来たのであるから、世間の人が"小平さんの会社"と見るのは少しも不自然ではなかった。然し、小平としては、あくまでも会社は会社であって、小平個人のものではないのである。いや、誰のものでもないのであるというならば、それは久原のものだと考えたかも知れない。創業のときの費用はすべて久原のフトコロから出ているからだ。

"専務取締役"になって敢て取締役社長とならないところに、久原に対する小平の気持が表現されているように思われるのである。彼が正式に社長の椅子に坐ったのは昭和四年のことで、それも鮎川義介の会長就任といっしょである。

(文責　賽人守)　(つづく)



宗像大社献詠俳句

厚　狭　篠田　南洞

誘蛾燈に火を借る顔の鬼なりき

吉　留　菱　花

玉葱の取れ急ぐ梅雨曇り

東　郷　小野　花居

みどりなるあの狼此の狼人だかり

〃　小野　淡坡

脳炎や回覧板に注射する

あゝ常陸丸 (十三)

帯仏当年にして三十四年八月帰朝の後、近衛師団機動演習の挙行せられたる際、前橋市民の請により、師団長長谷川中将は当時近衛兵第一聯隊第一大隊長陸軍歩兵少佐須知源次郎氏に命じ、同月二十一日前橋中学校講堂に於て軍事上の講和を為さしめられた。

当時中佐は新たに仏蘭西より帰朝し、満腹の新智識を蓄えて演壇に登り、乃ち「軍の成立」に就て講述せられたるなり。其の所論は、現下の国民に対して、最も趣味多かるべし。顧ふに之を読むもの、益ます中佐を惜しむの念を痛切にせざるべき、善疑を容れざるなり。

と当時日露戦争実記の編集者は語っている。

〃軍の成立〃

扨て諸君、今日私は長谷川師団長閣下の御申附に依り何か軍事上の御話を致す為め出馬致したのであります。然るに此の御申附は昨夜遅く……実は私の臥して居る処へ御命令があったので次急の事でございますから別に材料もなく又適当の考えもありませんから一応御断りしたのでありますが「モー極めたのだから兎に角行け」と云うことでございましたから能出ました様な次第であります。故に諸君の御参考になる様な有益な御話は到底出来ませんが唯だ私の思付た軍事上の御噺しをしてみようと思います。御聞苦しい処は御容赦を願いたい。

私の御断致そうと思う事は「軍の成立」とも申すべき事で軍隊は如何なる者で有るかと云う事を申述べ様と思います。御承知の如く軍隊は人員と馬匹とであります、けれども人員と馬匹とが寄った許で軍隊とは成りません、其人員と馬匹とに対して軍隊として教育を施したものでなければなりません、其教育を受た者が軍人で有ます又軍馬であります。けれどもそれだけでは未だ行かぬ、軍人なり軍馬なりには給養と云う者が必要であります、給養とは人員に食を与え衣服を着せる等の事で此の方法が無いと終には餓死なんとする事になります……夫れでも未だ足らない、其の給養と云う事軍馬を適当に区分配合して軍を編制しなければならぬ、又最も必要のものは之に副う所の武器であります。即ち人馬、教育、給養、編制、武器、此の五つの者が完備して始めて軍の成立を見るのであります、因て今此の五つの者に就て大体の説明を試みます。

凡そ文明の軍隊は必ず此五つの要素が完備して居りますが野蛮国の軍隊には缺て居る者があります…人員と武器とは有っても教育は勿論、給養と云う者がない。又編制と云うことも缺けて居る然るに文明国の軍隊には必ず是等の諸点が備って居るのである。是れ其の文野の分る、所以であります。

そこで第一の人員と云うは将官より兵卒に至るまでを総称したのであります。是等の人員が有する処の各階級に属する権力は整然として秩序を保ち決して乱れてはなりませぬ、将校と兵卒との関係は恰かも頭脳が手足を使うが如き有様でなければなりません。若しその一部に健全ならざる部分ある時は決して敏捷なる動作を為すことは出来ぬ者である。故に上に立つものは勿論健全でなければなりませんが最も私共が其健全を希望するのは人員の最も多数を占むる所の兵卒であります。顧ふに兵卒の善悪は一に国民の気風に頼るのであります、国民が愛国尚武の気風に富んで居れば其の国の軍隊は必ず好い軍隊であると云うことが分るのである。現に去る明治廿七八年の日清戦争及び昨卅三年の北清事件を見ても我が国の軍隊が各国の内に於ても特に好結果を収めたと云うものは詰り国民の愛国尚武の気風が強いと云う事を証明して余るのであります。それで私が愛国尚武の気風が強いと言うことに就て感じて居る事がありますから御噺し致しましょう。それは瑞西の事でありますが御承知の如く瑞西は欧羅巴の大国の間に挟まれて居る弱って小さい国であります。然るに今国が従来他の強国の侮蔑を受けずして其の疆土を保って居るものは国民が挙って愛国尚武の気風に富て居るからである、瑞西には常備兵と言うものは少しも無く皆な志願兵に頼るのであります。其の実際は殆んど全国の壮丁――男子は悉く兵であります。苟も男子は不具者にあらざる限りは悉く兵卒の実を有して居るものである。

(つづく)

あゝ常陸丸 (十三)

宗像歎庵先生百話

南方華かなりし頃

宗像太郎坊

タケゴンの羽衣

コタチャネよりプランケを経てタケゴンまでの戦略道路は、やっと開通し、海抜一、〇〇〇米の避暑地タケゴン(ここは有名な虎・象・鹿等の狩猟の中心地である)で祝賀会がされた。武藤章師団長はもちろん、ブキチンギより、はるばる田辺盛武軍司令官も出席まいか。昭和十九年も歳の暮、日本軍の戦況悪く、英軍上陸の報がしきりと入るし、師団司令部がタケゴン(Takingeum)に移ってくるというので糧秣確保、住民の情報蒐集のため、当時の某軍曹が、F機関と連絡を打つつ、無線装備で単身、農料深く潜入、部落から部落を廻っていた時に聴いた話である。日本人を初めて見るというような部落を廻っていたがまだ日本軍の優位を信じ、親切にしてくれ、つぎの話は、ラジャ・アブドラ・ウハップという村長から聞いたのである。

さて、これから北マトラ、アチエ州の「タケゴンの羽衣」を紹介しようと思うが、この伝説を世に出すのはわたしが嚆矢ではあるまいか。昭和十年も歳の暮、日本軍の戦況悪く、英軍上陸の報がしきりと入るし、師団司令部がタケゴン(Takingeum)に移ってくるというので糧秣確保、住民の情報蒐集のため、当時の某軍曹が、F機関と連絡を打つつ、無線装備で単身、農料深く潜入、部落から部落を廻っていた時に聴いた話である。日本人を初めて見るというような部落を廻っていたがまだ日本軍の優位を信じ、親切にしてくれ、つぎの話は、ラジャ・アブドラ・ウハップという村長から聞いたのである。

そのうちに、天女達が松林の上を飛んでタケゴンの丘へやって来た。老婆は天女が水浴に行っている間に七番目の天女の羽衣を胡座の下に隠してしまった。

(続く)

難く、ついにメダン日本人墓地の椰子の木にくくられて銃殺刑に処せられた。十歳頭のたには草ぼうぼうと生えて顧みるもいなかったが、去る五月、矢萩刑華雄少将その他、メダン処刑者の遺骨とともに東京港区浦桃橋に帰還した。

椰子油の灯の下で、蚊に喰われながら聞かされた思い出深い伝説である。

タワル湖(Laut Tawar)は湖尻が狭く、岩石の峻立した地形で、周囲は約四〇粁ある。現在民が魚を漁って生活するには、またとない漁場である。湖尻にそびえたった一つの岩山は高さ三〇米らいあって、上には一アール位の平坦なところがあり、よい眺めの場所があった。昔、ここにタケゴンが未開であった頃、一人の老婆が住んでいた。

この老婆の家に七人のアトリー Puteri(王女)が毎週、西の方の松林の上を羽衣をなびかせながら飛んで来て、涼風に愉しみながら、タケゴン盆地や湖水を眺め、一日をすごし、夕刻になるとふたたび羽衣をつけて、舞うように松林の上を飛んで、天に帰っていった。この七人の王女は実は姉妹で、その中でも末の七番目の王女が一番美しく優しかった。

また、この王女達は毎週来た時には一度、湖水に降りて行ってマンデー(水浴)をする習慣があった。この姿を偶然発見した一人の若い漁師がいた。かれは余りの美しさに毎週こっそり、かい間見ていたが、七番目の天女に思いを焦がし、ついに耐え切れなくなって丘の上に住む老婆の所へ行き、「じつはお婆さん、一生に一度の重大なお願いがあって来たのですが」と、自分の思いを縷々と述べて、どうか仲介の労をとってほしいと訴えた。しかし老婆の返事は冷酷で「わたしは七人の天女に休憩所を貸し、そのお姫様達はわたしを信用して遊びに来ているのに、地上のしかも一漁師にお姫様を世話することは出来ません」と、何回頼んでも聴き入れてくれなかった。青年は悲嘆に暮れたが、燃える思いをどうする事も出来ず、再三、タケゴンの丘を訪れた。ついに老婆も青年の熱意にほだされ「では若い者よ、彼女達は羽衣をつけて松林の上を飛んで来るのだから、七番目のお姫様の羽衣を隠してしまえば、夕方になっても天へ帰ることが出来ない。その時、お前はここに来て二人で話をしてみなさい」という。青年の喜びは、けだし想像外であったであろう。

そのうちに、天女達が松林の上を飛んでタケゴンの丘へやって来た。老婆は天女が水浴に行っている間に七番目の天女の羽衣を胡座の下に隠してしまった。

(続く)

(一頁よりつゞく)

宮田　北原きみ子

隣家の真紅のつつじ窓越に咲る、

葺き部屋の明るし

田島　小野　迪夫

青嵐過ぎ行く空を仰ぎつゝ故郷の田植ゑを老母嘆き給ふ

門司　永島　哲夫

長門峡の岩径ここ足よわきひと待ちをればほとゝぎす啼く

津屋崎　麦野　時雄

〃　桜井　ツ子

あかね色糸の二すじ見て初めてたちまちひゞくかしの音(二見浦)

福間　井原　元彦

山あひの淵に小鮒の躍りゐて農薬知らぬ深川の幸

武丸　立石　明

バスガイドの問ひに答へて一斉にハイとい、子ら邪気のない声　修学旅行)

武丸　立石ろせ

花のなき庭の花壇にバラの苗一本植ゑて朝々たのし

田島　力丸　登

若葉もえ野山は初夏のかほりたつ吾等土の子心せはしく

戸畑　山磨　昌子

管かとはるかに見えし藤棚の近より見れば幾千の花のふさ

香椎　桜井　秀

白水郎が住み島の柑子の香したてば夢限りなく海に広がる

〃　桜井　ツ子

冷害を憂ふる声す水際の稚実を早き梅雨ぬらす日に

深田　中野　節子

境内の池埋められて曇り日を蛙啼きつゝ小さき洋みに

原町　中村　幸

表賀の島の陽はおだやかに山裾の樹欅の花遠く見て佇つ